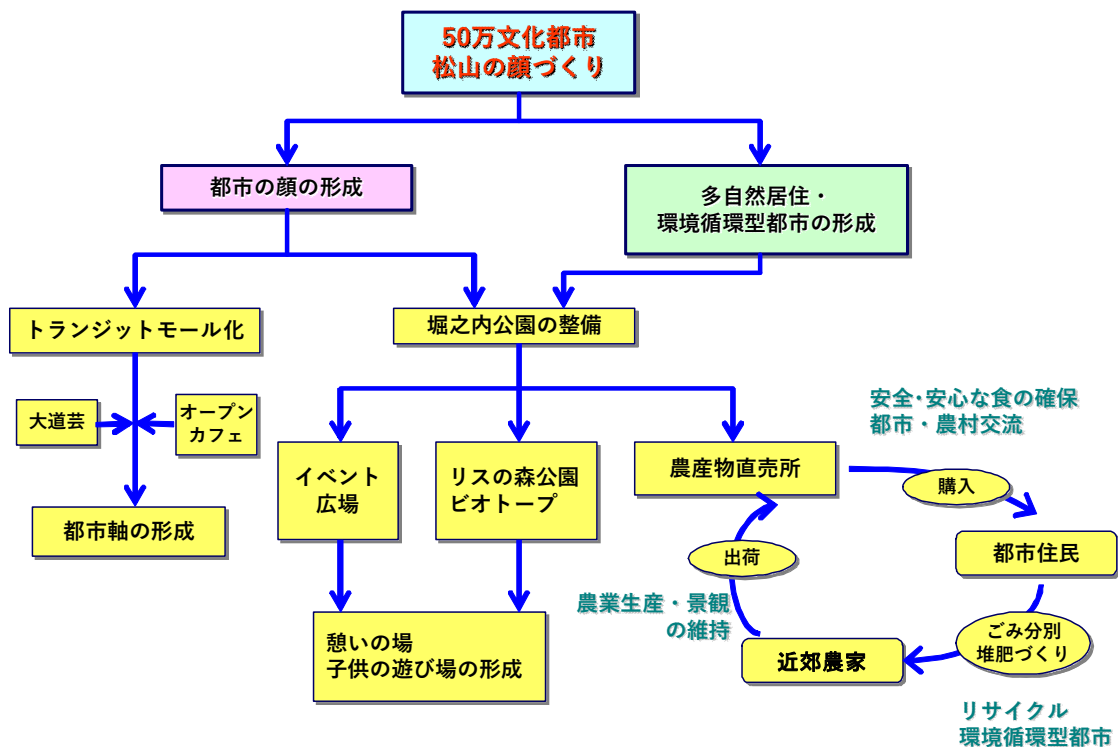


松山市50万文化都市の顔づくり —多自然居住のまなざしを入れて—  
 藤目節夫(シンクタンク『惣』)  
 中丸(旧姓西野)まどか(松山市役所)

<要約>

21世紀の都市の理想像は、文化都市・多自然居住型都市である。この小論は、50万都市松山をこの理想の都市に近づける提案であり、①都市の顔の形成、②多自然居住・環境循環型都市の形成、からなる。前者は、花園町をトランジットモール化して松山市駅・花園町・堀之内を一体化して個性溢れる松山市の都市軸とし、さらには堀之内をビオトープや植樹による「リスの森公園」とし、広場では農産物直売所が開かれる「都市のシンボル・交流」の場とする。後者は、直売所への出荷により松山平野の農家の収入増を実現し、都市近郊での農業生産・景観の維持を図って多自然居住型都市を、さらには「生ゴミ堆肥化→農家で使用→作物の直売所販売」のサイクルを確立して「安全・安心な食」の確保と「環境循環型都市」の創造を図るものである。この提案を住民主体で実施すれば、市民が都市の個性を創り、個性ある都市が市民を育てるまちづくりにも繋がる。



## 1. まちづくりの基本コンセプト

都市は、文明の所産であるが、また、文化を育むものでもある。20世紀の「生産の時代」に対し21世紀は「文化の時代」と言われ、「文化」が時代のキーワードとなり、あらゆるものが文化という視座からの再評価が要請される時代となってきた。都市も例外ではない。20世紀の「都市化の時代」を経て「都市の時代」に突入した21世紀においては、個性的で魅力的な都市の文化をいかに創造するかが、自治体のみならず住民、企業に問われている。

20世紀のわが国においては、文化は経済の慰み者的存在であったが、21世紀における文化は、経済はもとより、地域のアイデンティティの確立をも含意した真の地域活性化の基本的インフラであると言ってよい。商品の多くは機能に加えて文化でおしゃれをしなければ購買されず、また、都市や農村も機能のみの「住むことができるまち」から、文化の香る「住むに値するまち」にならなければ持続的な発展は不可能である。

まちづくりという視点から都市の文化をみると、都心にはその都市の個性と魅力を主張する「都市の顔」、換言すれば「ハレの場」が必要である。かつては中心商店街がその役割を果たしてきたが、いまや地方都市の中心商店街の多くは疲弊し、その再生が望まれているが容易ではない。国でも「中心市街地活性化法」を制定し都心の再生を図ろうとしてきたが、所期の目標はまったく達成できていない。その主要な原因は、都心の再生イコール中心商店街の活性化と早合点し、その対策にのみ終始したことである。

日本と同様に都心の衰退を招いたヨーロッパでは、その再生は都心文化の復活、すなわち都市の顔・ハレの場の再生であると考え、都心から車を排除し路面電車（LRT）を整備し、広場と一体となって歩行者優先のアメニティあふれる都心を再生し、それに付随して都心の商店街も復活を遂げた。何事も範を欧米にとるものではないが、ヨーロッパの都心の広場を中心とするハレの場の再生については、我が国においても見習うべき価値は大いにあると思われる。

もとより、古代ギリシャの都市国家のアゴラ（都心の広場）の伝統を持つヨーロッパの事例を、そのまま日本に導入することは容易ではない。既成の市街地の中心に広い面積の空間を確保するなど、ほとんどの都市において夢物語であろう。しかしながら、松山市においては夢ではない。堀之内という広大な空間が「都市の顔」となるべく適切な利用を待っており、路面電車の走る広い幅員と素晴らしい並木のある花園通りが松山市駅と堀之内を結んでいる。松山市駅、花園通り、そして堀之内を一体的に整備すれば、50万文化都市の顔となるポテンシャルは極めて高いと思われる。

魅力ある50万都市の創造は、都市の顔・ハレの場づくりだけでは達成できない。地方都市の特色を活かして、市街地の周辺は「緑」で取り囲まれる都市、換言すれば、「多自然居住型都市」を、さらには「環境の世紀」であることにも鑑みて「循環型環境都市」の

創造を目指す必要がある。これらの一連の目標はいずれも個別独立的なものではなく、都市の顔づくりと密接な関連を持った総合的なプランの中で達成されるものである。以下においてプランの詳細を示そう（付図参照）。

## 2. 都市の顔・ハレの場づくり：トランジットモール

都市の顔・ハレの場づくりの第1はトランジットモールである。花園町から車を締め出し、街路は路面電車と歩行者のみが通行可能とし（トランジットモール）、美しい並木のある街路の両側はオープンカフェとする（バスについては、千舟町通りを利用して松山市駅にアクセスするものとする）。このようにすれば、これまで孤立して存在していた交通ターミナルの松山市駅と堀之内は花園町で連結されるので、市駅・花園町・堀之内は一体となって50万都市の顔となるポテンシャルティを得たことになる。現代都市においては都市を代表する都市軸が必要であるが、トランジットモール化により花園町は個性とアメニティ溢れる都市軸となり、そこでは大道芸や魅力あるイベントが日常的に催され、多くの人々が集い、交流し、都市のハレの場の楽しさを楽しむことができるであろう。花園町のトランジットモール化は、近年推奨されている「歩けるまちづくり」に文化でおしゃれをする実践例ともなり、今冬から開始された「ひかりの花園プロムナード」にもより一層の輝きを加えることは想像に難くない。

## 3. 都市の顔・ハレの場づくり：堀之内公園

都市の顔・ハレの場づくりの第2は堀之内公園の整備である。都心に残された貴重な空間利用の成否が、21世紀における松山市の魅力を決するといっても過言ではない。この公園の整備の基本コンセプトは「都市のシンボル性・交流」である。規模は異なるものの理念的にはニューヨークのセントラルパークのような都市のシンボルをイメージして、植樹とビオトープの整備、それに交流を育む各種のイベントができる森と広場の整備を行う。森はリスが棲息する「リスの森公園」とし、そのために植樹する樹種については、リスの餌になり、かつ風土に適した木の実のなる樹木を中心にする。幸いなことに、城山には野生のリスが棲息しているとのことゆえ、多少餌付けしたリスの棲息には生物環境的に問題ないと思われる。また、ビオトープについてはトンボや蛙やメダカの棲む池を整備し、子供たちの楽しい遊び場としての機能も持たす。

広場については、平日は市民が集い、語り、憩える場とするが、土日には農産物直売所を開催し、賑わいの場を創出することとする。この直売所への出荷者は松山平野の農家に限定し、彼らの所得向上を図ることにより都心を取り巻くグリーンベルト地帯における農業の存続を図る。農業が維持されれば、それは自然環境や農村景観を維持することでもあるので、結局は、都心の農産物直売所を活用した多自然居住型都市の創造が可能になると

いうことになる。

顔の見える農業者による農作物の提供は市民の「食の安全・安心」にもつながるが、消費者である都市住民と生産者である農業者が連携すれば、「食の安全・安心」をより一層推進することができる。その方法は、都市住民が生ゴミを徹底的に分別収集することにより良質の堆肥を生産し、それを農家が使用して有機農産物を生産し消費者に届けるやり方である。これが実現すれば、都心のハレの場の活用を通して、最終的には「環境循環型都市」の創造も視野に入れることができるであろう。このシステムをうまく稼働させるために、生ゴミ分別協力者に農産物直売所での有機農産物の優先的購入券を付与するのも一考であろう。なお、生ゴミの分別は個人レベルでは不可能なので、地域コミュニティ組織や生協などの組織を利用することになるだろうが、この活動を行えば副産物として「住民自治」のまちづくりが進展することも期待できる。

なお、本プランでは紙面の都合で既存の中心商店街に言及しないが、これらは当然、都市の顔の構成要素であり、市駅・花園町・堀之内と一体となって回遊型の都市の顔を形成するものである。

#### **4. 住民と行政の協働のまちづくり**

以上が「50万文化都市の顔づくり」プランの概要であるが、最後にまちづくりの主体について言及しておきたい。わが国では、不幸なことに長い間、まちづくりは住民ではなく行政の役割であるとの考えが支配的であったが、平成の大合併なども経た今日、未だ大勢とはなっていないが、行政任せでは愛着があり魅力的で、かつ他に誇れるまちづくりは不可能であり、やはり住民が主体となってまちづくりを実践する「自己責任のまちづくり」が必要であるとの認識が生まれてきた。

地域に対する愛着や誇り意識は、地域に対する思い入れを前提としており、その思い入れは「知恵を出し、汗を出し、場合によっては、金を出す」まちづくりを地域住民自らが実践する以外に醸成されるものではない。市民のこのような主体的な活動をサポートしてより良いまちを創ってゆくのが、「市民の政府」としての自治体の役割である。今回提案したプランも、住民と行政が協働して議論を重ね練り上げてゆくことにより、思い入れの入ったプランとなるのであり、そのことがプランの実効性を担保するものとなるのである。

21世紀の都市は、個性のある魅力的な都市でなければならない。市民が都市の個性を創り、個性ある都市が市民を育てるのである。

最後に余談であるが、トランジットモールを活かした「50万文化都市の顔づくり」プランが実現すれば、視察好きな日本人の多数の訪問が期待できるので、交流人口は飛躍的に増大し、結果的には地域経済の活性化に繋がることにもなろう。まさに、「交流人口を育み活かすまちづくり」の実践である。